

## 『難波の貞は伊勢の白粉』卷二の一話——上村千之助——

廣瀬千紗子

—

天和三年正月刊、全五冊のうち卷一、卷三の二冊のみが現存する本書は、<sup>①</sup>体裁・内容からは役者評判記に分類されてしかるべきものではあるが、浮世草子の文体をそなえていることでも知られている。愛媛近世文学研究会『評釈難波の貞は伊勢の白粉』<sup>②</sup>(以下『評釈』)解説では、それまでの評判記が役者の容色を第三者的に紹介したものであったのに対して、本書は「いわばそれぞれの役者に対する褒詞集という内容を持つもの」とされる。両者の評の相違がよく言い当てられていよう。たしかに本書の評の態度からは、二人称的に役者に呼びかけているような印象を受けることが多い。

また半紙本で役者の姿絵と狂歌を載せる形式には『野郎大仏

師』(寛文七年、一部八年)、『役者八景』(延宝八年)に前例があるが、本書は「前行評判記の形式を踏襲したものながら、しかしその評判は従来の姿色本位を離れて、漸く技芸の批評にも触れようとしてゐることが注目せられる」(『定本西鶴全集』第九卷、野間光辰解説。以下『定本』)のであって、評判記の変遷を先取りしてもいる。しかしながら、これをその他の評判記の通例にならって演劇資料として用いようとすれば、役者の動靜に関する情報量は意外に少なく、以後の評判記への影響もほとんどみられない。むしろ本書は、歌舞伎若衆に取材した『男色大鑑』(貞享四年刊)巻五以下、及び『嵐無常物語』(元禄元年刊)へと、その後の西鶴の浮世草子作品の方向を示した点に意義が認められている(土田衛氏項目執筆『日本古典文学大辞典』)。事実、褒詞へつなぐまでの、ときには評からはなれた戯

文に短編小説の佳品が紛れている。卷二にそれが顕著である。評判記とはいいなながら、おのずから浮世草子として読まれてきたのが実情だといってよいだろう。

二

卷二は嵐・鈴木座の役者一五名を載せる。前掲『評釈』の「略伝」（土田衛氏執筆）に従えば、このなかに、番付をのぞいては本書に載る以外に、全く伝記資料が伝わらない者がある。松玉小太夫・上村千之助・西川歌之助・岩井重之丞の四名である。そして、この四名分については評を欠き、かわりにいずれもそろって、一話の佳品が綴られているのである。ただし、松玉小太夫は狂歌に詠まれるのみで登場せず、ここには懐算用をする興ざめな大尽に粹が説かれる。上村は薩摩時代のエピソード、西川は同名の絵師狩野雅楽助を口実にしての急転の妙、岩井は「大句数」の句から構想された、彼自身の「花踏まんことを惜しむ美少年の春」の面目、というものである。いずれも『定本』に注、『評釈』に注と解釈が備わる。松玉、西川、岩井については、これらに譲る。いま一名、上村千之助にかかわる話には、いくらか試案の余地があると思われるので、一考し

てみたい。

上村千之助は、上述のように本書以外には記事がないが、わずかに『ねのとしかほみせ大和屋甚兵衛役者付』すなわち、天和三年一月（貞享元年度・子の年）、大和屋座の顔見世番付（阪急池田文庫蔵写本、『攝陽奇観』一八所収、歌舞伎年表所載）の、若衆方三位にその名がみえる。また作者に富永平兵衛がいる。若衆方の位置は最上段で、登載の役者は合わせて「六十五人」と本番付にある。千之助は当時では知られた役者だったのだろう。本書刊行時の正月は嵐・鈴木座であったから、翌年度は大和屋座へ移ったことになる。

この一話では、千之助の名前は伏せられたまま進行し、最後に「あの上村千之助が……」と判明する。それをあらかじめ薩摩時代のエピソードと言ってしまったのは興趣は半減するが、ここはやむを得ない。短い話なので、『定本』から全文を引いて大意を付す。漢字、送り仮名、句読点は一部私に改め、適宜「」を付した。なお内容を勘案して本文を【1】【2】【3】【4】の四部に分ち、改行で示した。

【本文】

【1】 北はしらがまじりの山の端、秋もはや梢あらはにいとど淋しき一軒屋の飯の舎を出らるるが、

【2】 やせたるがた／＼を借り寄せて、渋紙包み二ツ、小付け、「何々跡付がみえぬ。亭主、急ぎ尋ねて出せ」「あつ」と答ていづちへか走りけん、ついに戻らず。件の乗り手殿、腹悪しくいきらるるところへ、やう／＼帰りきて片息の仕合せ、しばしは物も得いはず。いざなひたる若者、打ちひざまづきて、「亭主、麓相な人じや。夜前の大臣かと思はせて、いはれぬところへ出された」と云。尋ねきけば、「さる野郎に付るこんがう、跡付ともまた合羽箱とも申まする」。乗り手殿、「さてはかかる山里にも人の情けはありけるよな。我四、五年以前江戸等にてかかる異名を聞ふれし。さらに若やく心せり」とて、いぶせき茅屋にまたとどまり、「そちがつかふる若衆を」とてやがて召しけるほどに、

【3】 つひの泪、袖に時雨、降りみ降らずみ、けふもまよ、明日も逗留よと、後は彼の合羽持ち合わせたる事までも打忘れて、

【4】 なんと、さる浪人衆の咄に聞いたは、あの上村千之助

がいまだ蔭なる時の事。今度地舞台をふむとの、色そみつやなれ、またあのやうにもなるものか。

播州 哥笑子

千にひとつ偽りあらばころしをれ

上村しくれぬれそめしより

〔大意〕

北の山の端は薄雪がかかり、梢の葉もすっかり落ちた晩秋のこと。わびしい旅宿を出立し、やせ馬を借りて荷物をのせようとした男が、跡付（馬の後に乗せる荷物）がみえぬと宿の亭主に急いで探させたところ、亭主はどこへやら走って行って、若者をつれて戻ってきた。若者は不平をいうが、跡付といえは金剛（若衆の供をする草履取りの若者）のこと、千之助の金剛を跡付とも合羽箱ともいうので、亭主が取り違えたのである。訳がわかると、こんな山里にも人の情けを解する恋心はあったのだと男は感じ入り、出立を取りやめて、ここに留まってみることにした。若者が仕える千之助をすぐに呼びよせて、そのまま深い契りとなった。そうなれば別れの涙は袖にこぼれる。おりしも時

雨は降りみ降らずみ。発つに発てず、今日もままよ、明日も逗留よと、のちはあの合羽を持ち合わせていたことまでも忘れていつまでも……などとさる浪人の咄に聞いたのは、あの上村千之助がまだ蔭間のときのこと。このたび千之助が大芝居の舞台を踏むという。さぞかし色に染みつやも増したのだろう。磨けばまたあのようにもなるものか。

攝州 哥笑子

村時雨にぬれそめて、上村千之助と恋に堕ちてからと  
いうもの、心にうそ偽りはない。もし千にひとつでも  
偽りがあれば、ころしおれ<sup>(4)</sup>

さて、この一話は、「さる浪人衆」からきいた咄として、もう一人の話し手によってここに述べられているが、この浪人こそ、千之助と契りをもった「乗り手殿」であろう。旅宿を出て乗り掛け馬を借り、今まさに出立してしまはずだった旅の男が、跡付がみあたらなかったばかりに、そして宿の亭主が跡付を金剛のことだと思ひこんで、若者をつれて来たために、事態はあらぬ方向へ展開する。『評釈』では、この亭主が跡付を「馬鹿正直に尋ね回った」ことが「的はずれの努力だけに、そ

『難波の貞は伊勢の白粉』巻二の一話

の失敗は思わず笑いを誘う」とし、もっぱら「喜劇的手法」に注目して浪人の執心ぶりに及び、「人の心の急所や弱点をぐつとつかみ出して誇張する喜劇的手法が見事である」と評価された。さらに西鶴晩年の手法だともいわれる。たしかにこの一話は「異名による取り違え」の末の衆道話として読んでも、十分に滑稽な小品である。しかし浪人の執心ぶりが喜劇的手法で誇張されているかといえは、それは疑問に思われる。以下、そのことをめぐって検討する。

### 三

先の本文に示した通り、浪人の咄は「乗り手殿」と若衆の衆道話として終結する。そこに至るまでの状況設定に過半以上が費やされ【1】【2】、千之助があらわれて恋に堕ちてからは、わずかに数言でこの話は終わる【3】。千之助が呼ばれたのは、跡付騒ぎの直後、おそらくその日のうちのことであろう。それから逗留は何日に及んだことか。一見、アンバランスにもみえる構成である。このような時間処理のしかたは、後の『日本永代蔵』巻一の二、「二代目に破る扇の風」を思わせるものだが、二代目の場合は、封じ文を拾ってから、島原に最初の一步を踏

み入れるまでの長いためらいと、いったん大門をくぐってから  
の没落の早さ、あつげなきのコントラストが、即物的に構成と  
重なって効果をあげている。しかし千之助の場合は、必ずしも  
アンバランスな構成とはいえないところがある。彼らが過ごし  
ている時間の内実は表面にはあらわれず、この恋は「つひの  
泪」「袖に時雨」「降りみ降らずみ」の三語に尽きている。「つ  
ひの涙」はもうこれ切りで会えない、という「終(つひ)」で  
あろう。当時の歌謡は「別れ」の「涙」をうたう。

・けふはふり行く時雨の雲よ、神んぞ八幡わすられぬ、袖は  
別れの露なみだ(松の葉・三・廿七しら菊、元禄一六年  
刊)

・しぐれしぐるる涙の雨に、そでを紅葉の色にそむ(当世投  
げ節・延宝ころか)

当世流行の歌謡の常套句に「別れ」と「涙」、「時雨」「袖」  
「露」は不可欠であるが、それ以上に「時雨」には、藤原定家  
書写本系統『後撰和歌集』の、巻第八所収歌(四四三―四七  
〇)<sup>(5)</sup>、及び『続後拾遺和歌集』巻第六所収、次掲の詞書をもつ  
定家の歌(四一五)にもとづいて、伝統的連想のパターンが形  
成されている。

・神無月ふりみみならずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりけ  
る(後撰集・八冬・四四五・題しらず、読人も)

・偽りのなき世なりけり神無月たが誠より時雨そめけん(続  
後拾遺集・六冬・四一五・定家、詞書に「時雨、時を知る  
といへる心を」)(拾遺愚草では「時雨知時」<sup>(註)</sup>)

・時雨——北の峰・冬立つそら・袖の涙・神無月・いつはり  
のなき世(俳諧類船集・六下)

すなわち、乗り手殿は「冬のはじめ」に、「降りみ降らずみ」  
の定めなき「時雨」のために、あるいはそれをひそやかな僥倖  
として、千之助とともに「いぶせき茅屋」(後述するが、冒頭  
では「いとど淋しき一軒屋」であった)に長逗留することに  
なってしまう。ところが、彼らの現在に即して、この場の恋  
を語る言葉がここにはない。それにかわるものは「つひの泪」  
「袖に時雨」「降りみ降らずみ」という、すでに固定した心意  
をもつ語である。これらの語によって彼らの恋は、彼らの背後  
で伝統的「時雨」が喚起する、さまざまな「恋というもの」の  
ひとつとして、暗示される。いわば付合語の機能に等しいので  
ある。<sup>(6)</sup> よってこの恋を語るにはわずかに数言で足りたのである。

さらにまた前掲『後撰集』の「さだめなき時雨」は、その定

めのなさのゆえに、西鶴においては、恋の「偽り」と「誠」の比喩として、つぎの類型的連想をなさしめている。

・此のさとの事は、皆偽りかとおもへば、折ふしはまことの降りけり。時雨も初めの薄雲ほど情ふかきはなし（諸艶大鑑・一・四）

・御心うつり替りて何事も偽り時雨ふる初の三日には極めて

（男色大鑑・二・一）

この種の例は多い。しかし、「なんと亭主替つた恋は御ざらぬか」（『大句数』八）と、当世の恋を見越してしまうことにもまた、西鶴はためらいを禁じ得なかつたのではあるまいか。ややもすると、「取り違え」の騒ぎに輻晦されかねない乗り手殿を見逃してはならないだろう。

#### 四

あらためて乗り手殿である浪人をみておく。いざ出立するとうちよきになって荷物のみえず、少々いらだつて「亭主、急ぎ尋ねて出せ」と詰問したらしい。亭主が「あつ」と答えて走って行ったのも、乗り手殿のさし迫った気配を感じてのことであるろうか。亭主が帰って来るまでいつまでも出立を待たされ、つ

『難波の貞は伊勢の白粉』巻一の一話

い先程までいきまいていた乗り手殿が、いとまたやすくここに留まることにしたのは、げんきんにも千之助に出会ったからではない。荷物と間違われて若者がつれて来られた、その訳を知ったからである。千之助が呼ばれるのは、その後のことである。

乗り手殿は四五年以前、江戸あたりで金剛が跡付ともいわれると耳にしたことがある。粋ななりゆきだったのか。つまり、うって変わっていまここはいぶせき茅屋であるが、こんな粗末な旅宿の亭主ですら、跡付といえは荷物よりはまず金剛のことを思う。乗り手殿は「人の情けはありける」ことに感じ入った。

この晩秋の淋しき山里に、思いがけずも、恋を知る心を見つけたのである。そうと知って促されるものがあり、何があったか江戸でのことも思い出されて「さらに若やぐ心」をおぼえ、しばらくここに留まるつもりになった。そういう乗り手殿こそ、恋知りというべきである。ちょうど三年前のことが、延宝八年九月刊『江戸大坂通し馬』に、

・江戸の様子皆までおしやるな山は雪

西鶴

時雨先立つ六日目の朝

梅朝

・はやけさの別れは鳥毛狹箱

西鶴

ふりくる泪合羽箆よふ

梅朝

とあるのを見れば、乗り手殿を梅朝に仮託したかとまではいいないが、江戸のこともやみくもに口にのぼったわけではないだろう。かくみてくれば、この一話の千之助は乗り手殿が恋知りであつたことの帰結として、この場に呼ばれたのだということになる。千之助との恋そのものが語られないのは、ここにも理由があつたのである。そして一軒屋がせめて茅屋になつたのは、ただの旅人だつた男が、恋を知る者の一面をみせたこととみあつてゐるだろう。

ままよと逗留するうちに、「彼の合羽持ち合せたる事までも忘れ」てと、ふたたび金剛の、こんどはもう一つの異名で浪人は咄を終える。旅の途次で時雨くらいはしのげるはずの合羽を持ち合わせていることも、そもそもこうなる発端の、千之助に仕えていたあの若者のことも忘れてしまうほどであつた、と。

五

この一話が「喜劇的手法」で描いてゐるものは、旅の途次の山里の恋心であつた。その視点から今一度読みなおしてみれば、実はこの話は最初から恋仕立てであつたことに気づく。「仮の舎」を出ることもまた、恋への出立ちになぞらえてうたわれる。

・ 惜しまじな、命は露の仮の宿たち出そめて我が袖は露か涙  
かしつぽと濡れて（長歌古今集、天和二年刊）

そして、乗り掛け馬が担うのは、旅の荷物だけではない。

・ 馬はあれども、君を思へば徒歩路、さは云ひながら、恋の  
重荷を何に乗せてやらうぞ（松の葉）

・ 伊勢の櫛田の真ん中程で、深き思ひのやれ紫帽子（略）恋  
の重荷を乗り掛け馬に、離れ難なき我が思い（落葉集・五、  
元禄一七七年刊）

・ 恋の重荷に小付して、親子のあはれ打ちのせて（寿の門  
松・中）

さらに、冒頭の晩秋の描写のなかの、仮の舎、のちの茅屋のた  
たずまいは、『毛吹草』『付合』の「亭（ちん） 時雨」による  
までもなく藤原定家の時雨亭を想起させる。晩秋とあらば、や  
がて時雨も降るべく、はたして冒頭の文辞・情景は謡曲『定  
家』の詞章と酷似する。

【本文】

【一】 北は白髪まじり山の端、秋もはや梢あらはにいとど淋  
しき一軒屋の仮の舎を出らるるが

・山より出づる北時雨、山より出づる北時雨、行方や定めな  
かるらん（日本古典文学全集謡曲集『定家』、以下同）

・冬立つや、旅の衣のあさまだき、旅の衣の朝まだき、雲も  
ゆき交ふ遠近の山また山を越え過ぎて

・面白や、頃は神無月十日あまり、木々の梢も冬枯れて、枝  
に残りの紅葉の色、

・あら笑止や、俄かに時雨が降り来りて候、これに由ありげ  
なる宿りの候、立ち寄り時雨を晴らさばやと思ひ候、

そこでワキの旅僧が立ち寄つた宿りとは、

・（ワキ）さてここをばいづくと申し候ふぞ、（シテ）それ  
は時雨の亭とて由ある所なり。その心をも知ろしめして立  
ち寄せ給ふかと思へばかやうに申すなり。

シテに問われたワキは、「時雨の亭」と書かれた額をみて、つ  
ぎのように答える。

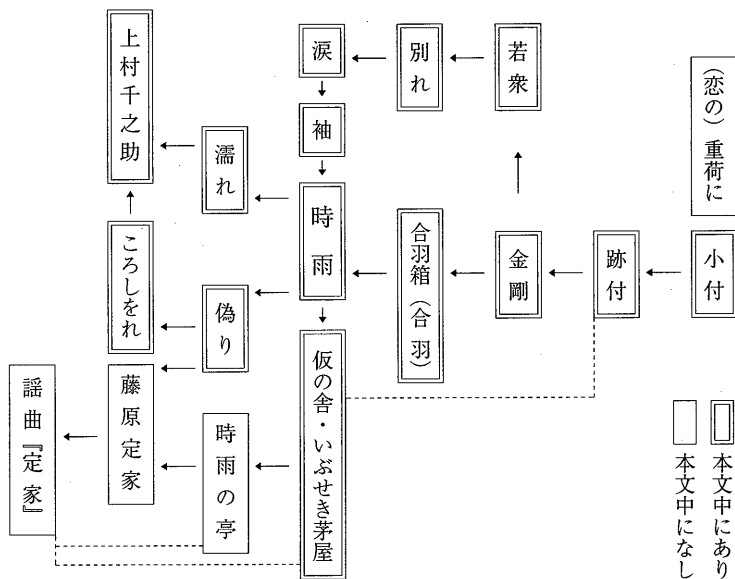
・折から面白うこそ候へ、これはいかなる人の建て置かれた  
る所にて候ふぞ。

知らずに立ち寄つた旅僧が、「由ありげなる宿り」に「面白う」  
心ひかれる場面である。このあとに前引定家歌の詞書、『拾遺  
愚草』の「時雨、時を知るといふ心」が引用される。ひるが

えって本話では神無月に必ず時雨が降ることが、偽りのなき世  
の誠であるように、誠のあかしてある時雨に降り込められた山  
里の茅屋でのこの恋が、もしも偽りだといふのなら「千にひと  
つ偽りあらばころしをれ上村しぐれぬれそめしより」と、いわ  
なければならぬのである。

まことに勝手な想像で、読み来ってしまった。以上をまとめ  
て、この一話の構想を図示すれば、別掲のようになるであろう。  
臆測に近いかもしれぬが、いま仮に『定家』のワキの旅僧を、  
旅人としての乗り手殿に重ねてみれば、彼らとともに時雨降る  
頃に宿りを訪ねきて、思いがけず恋を見出した者である。片や  
ふりにし昔の定家の恋、片や現世の若衆の恋であった。「由あ  
りげなる宿り」に立ち寄らずにはすまなかつた旅僧の当世の姿  
が、茅屋に留つた乗り手殿とはいえないだろうか。上村千之助  
に託されたこの一話は、実は「取り違え」の騒ぎを趣向に、謡  
曲『定家』の前半、後ジテ式子内親王の登場するまでを当世に  
もどいてみせたのではないか。<sup>(9)</sup>もしやそうだとすれば、別掲の  
構想図の矢印は謡曲『定家』からはじまって、逆方向に向かう  
ことになるだろう。いずれにしても、冬のはじめの「時雨」が  
発想の中心にあることは、明らかだと思われる。





〔注〕

- (1) 土田衛氏『難波の良は伊勢の白粉』の刊年、『ピブリア』31 昭和40年6月。本書の本文は、『定本西鶴全集』第9巻、中央公論社、及び『歌舞伎評判記集成』1期1巻、岩波書店、所収。
- (2) 昭和41年発行、非売品。愛媛近世文学研究会は、土田衛、米谷巖、白方勝、丸木一秋の四氏。
- (3) 「乗懸下貫目之儀、下荷二〇貫目相極、外二蒲団・跡付・中敷・小付一式不残三四貫目迄ハ令用捨、及五貫目候ハゞ急度相断」『御触書寛保集成』二十二、道中筋之部。正徳三年九月。
- (4) 「ころしをれ」は役者のほめ言葉。「天晴れ天人のうはもり、うつくしき事絵にもいわれぬ、ころしをれ、目もとの海より見物みちく」『難波立聞昔語』小桜小太夫、貞享三年一二月刊。
- (5) 『後撰和歌集』巻第八は、四四三〜四五四が初時雨・冬のはじめ、四五五〜四六〇が時雨・もみぢ、四六一〜四六四が霜、四六五〜四七六が霰・初雪と次第に秋の深まりを追うように収載されている。本文冒頭の「北はしらがまじりの山の端」は四六八歌の「黒髪の色ろくなり行く身にしあればまづ初雪をあはれとぞみる」によつたものか。岩波文庫本による。
- (6) 野間光辰氏「嵐無情物語」九に「西鶴の俳諧における

付物の固定化であるが、構想において場面の設定において事件の配置において、また文章の構成において、俳諧的手法を小説に応用した彼の作品には、随所にそれを指摘することが出来るであろう」と説かれるのが示唆深い。

『西鶴新新攷』所収、二八一頁。一九八一年、岩波書店。

ただ小稿は著作考ではないが、西村義明氏「西鶴著作考の一つの節——俳諧的手法による考察方法の限界について——」『国語』昭和32年6月、にいわれるように、付合において西鶴独自の表現を認めるには、なお慎重であらねばならないだろう。

- (7) 『江戸大坂通し馬』の梅朝は兼豊発句に「花に匂ひ人に前髪句に姿」、西鶴詞書に「沢井梅朝子：はたちにもたらさりし内に其名は高根の桜」という十代の若さである。穎原退蔵氏解題（著作集第5巻所収）、野間光辰氏「補刪西鶴年譜考證」参照。野間氏「新編宗因書簡集」一九、天和元年十一月二十一日付、日下玄隆・渡辺宗賢宛に宗因との両吟がみえる。梅朝は、洛北鳴滝とおぼしき山里に閑居する晩年の宗因に随従したらしいとされる。書簡の年次は推定である。『談林談叢』所収、三二一六頁。
- (8) 謡曲の曲名に『恋の重荷』があるが、本話の内容とは無関係である。

- (9) 伊藤正義氏は『定家』について素材的には「定家と式子内親王の恋愛事件そのものではなく、定家葛が象徴す

『難波の貞は伊勢の白粉』巻二の一話

る邪淫の妄執という主題に再構成したのであって、いわゆる本説に依拠した能でない点は、『芭蕉』などに同様の禅竹の方法といえよう」とされる。「定家——定家の執心葛となつて——」『謡曲雜記』所収、一五四頁。一九八九年、和泉書院刊。上村千之助の場合も、彼らの恋そのものが主題ではない。ちなみに『武家義理物語』五・五に「其後、又旅人の雨やどりの浮晴しに、酒の友と成けるに、此男も又定家（ここでは遊女）になつみて」と、類似の設定がみられる。

なお、『定家』後半は「時雨と霜、もみぢ（葛紅葉）、葛葛を一曲の展開上のイメージに布置している」（伊藤氏）が、千之助の話は冬のはじめの時雨を興趣とする。注(5)参照。

#### 付記

小稿は去る一九八九年七月一日、西鶴輪講会七月例会における担当分の報告に基づいている。輪講という性格上躊躇があったが、いささか追考したところもあるので、発表することにした。ご了解願いたい。濱田啓介先生をはじめ例会ご出席の方々に謝意を表します。また、番付については土田衛先生のお手をわずらわせた。篤く御礼申し上げます。